

「類似」概念の実効性

秋庭 史典（名古屋大学）

作品の科学的調査の是非をめぐる論争の背景には、少なくとも三つの相互に関連する伝統的な問題がある。ひとつは、作品の同一性の問題、もうひとつは、創造・発見・発明の区別の問題、さらにもうひとつは、科学と美術史における観察の問題である。本発表は、これらの問題の美学上のポイントである同一性概念と、それに代わるものとしてしばしば取り上げられる「類似」概念について、考察しなおすものである。

第一章では、作品を見る科学者と美術史研究者のあいだの違いを、それぞれが「肉眼で観察不可能なものについての知識」と取り結ぶ関係の違いから考察する。美術史研究には少なくとも二つの「観察不可能なもの」があるが、そのうち美術史研究が、一方を認めて他方を認められない理由があるのだろうか。かりにあるとすればそれはなぜだろうか。作品の同一性が、考察のポイントとして浮かび上がる。

その問題を、第二章で取り上げる。ある作品が他の作品とは異なるその作品であることを決定するのは何かという問題は、誰もが納得する答えを得ているわけではない。主として音楽作品を念頭において行われた過去の考察では、周知のように、その同一性を保証するのは、楽譜なのか？ 音構造なのか？ コンテキストなのか？ 音構造への到達過程なのか？ 作品名なのか？ などの問いがしつこく投げかけられてきた。これらの問いを、必要な変更を加え、美術作品に関してあらためて考察する。こうした議論の前提になつて

いるのは、「創造と発明、発見、選択はどう違うのか」という問いである。

第三章ではこの問題を扱う。他とは違うユニークな作品が「創造される」と考えるのでなければ、他とは違うほかならぬその作品であるとは何か（つまり作品の同一性とは何か）を云々する必要はなく、作品の同時多数性を認めてしまえばよい。そのとき芸術的創造と科学的発見を区別するものはなく、芸術作品を特別視する理由はなくなるかもしれない。

最終章では、こうして廃された同一性概念に代わり、すでに多くの論者によって支持されている「類似性」の概念の実効性について論じる。ミリカンによる生物学の哲学に依拠しつつ進化分類の立場にたつて作品の同一性を考え直すとする議論、作品をめぐる創造・発見・発見についての問題をデネットに依拠して進化論的に論じる議論なども考慮に入れながら、第三章までに指摘したさまざまな問題に対し、類似性概念がほんとうに実効的なものなのか、またその実効性を高めるためには、どのような点での改良が必要なのかを示したい。